総索引への注文

宮島達夫

一

近ごろ、いろんな作品や辞書類の索引がつぎつぎに出版され、研究がたいへん便利になったことはよろこばしい。これらの索引をつくるには、それぞれ苦心があったことはいうまでもないが、つかう立ち場になると、またいろいろと不満・希望がでてくる。最近、いくつかの総索引をややくわしく見る機会があったので、そのとき気づいたことをつぎにのべたいとおもう。

検討の対象とした総索引は、つぎのとおりである。

正宗敦夫「万葉集総索引」（「万葉集大成」による）
山田忠雄「竹取物語総索引」
伴久美「伊勢物語に就きての研究　索引篇」（大津有一編「伊勢物語に就きての研究」所収）
西下経一・滝沢貞夫「古今集総索引」
日本大学文理学部国文学研究室「土左日記総索引」
大阪女子大学国文学研究室「後撰和歌集総索引」
佐伯梅友・伊牟田経久「かげろふ日記総索引」
榊原邦彦・武山隆昭・塚原清・藤掛和美「枕草子総索引」
吉沢義則・木之下正雄「対校源氏物語新釈用語索引」
池田亀鑑「源氏物語大成　索引篇」
東京教育大学中古文学研究部会「紫式部日記用語索引」
東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾「更級日記総索引」
青木伶子「方丈記総索引」
時枝誠記「徒然草総索引」
京都大学文学部国語学国文学研究室「文禄二年耶蘇会板伊曽保物語」
井上章「天草版伊曽保物語」
井本農一・原岡秀人「奥の細道総索引」

以下、作品および総索引をあらわすのに、おなじ略称をつかう。たとえば、「万葉」は、作品としての「万葉集」および正宗敦夫編「万葉集総索引」の略である。

二

ここでは、主として、あることばを索引にのせる際のあつかい方

の不統一をとりあげる。これは、ぼくが索引をつかったときの調査目的の性質上、その点に特に不便を感じたからだ。理想的な索引はどうあるべきか、というテーマを正面から論じるならば、まだほかの観点もあるだろう。たとえば、あることばをどうあつかっているか以前に、そもそも索引としてのもっとも基本的な条件は、すべてのことばを、もれなくひろっていることにあるはずだ。ぼくのばあい、そういう目で見ていなかったので、今ある索引類が、どの程度にこの条件をみたしているかについていうことはできない。ただ、たまたま気づいた脱落の例がいくつかあることからすれば、まだまだほかにも脱落があるのではないかという気がする。たとえば、万葉では、

いたくし恋ひば今かへり（還）こむ（三三二）

竹玉を間なく貫きたり（垂）（四二〇）

が、後撰では

きみまつの葉にかかりてぞ降る（一〇七四）

が、更級では

土をあがりたる高さ三四尺（七一一）

が、索引からおちている。なお、これは脱落にくらべれば実害がすくないが、後撰の「降る（四六七）」「古す（七三九）」「見る（八〇〇）」のように、おなじ見出しの下に重複して出ている、という逆のばあいもある。

さて「不統一」ということのなかには、つぎの三つのばあいがふくまれる。

(1) おなじことばが一つの索引のなかでまちまちにあつかわれているもの

(2) おなじ種類のことばが一つの索引のなかでまちまちにあつかわれているもの

(3) おなじ種類のことばが索引によってまちまちにあつかわれているもの

第一の型の不統一は、不注意によるものであり、第二の型は方針がキチンとたっていないため、第三の型は編者によって意見がちがうためにおこる。以下には、第二・第三の型の不統一をとりあげることにする。第一の型は誤植や、古今の動詞「なる」の項目に助動詞「なり」が数例混入している、というようなのと同質のミスで、一般的に編者の注意力に期待する以外、しかたがないものだから。ただ、この種のミスも事実あるのだということをしめすために、万葉の例をあげよう。

馬なめていざうちゆかな（三九五四）

については後要素の「ゆか」を重出し、

浜辺よりわがうちゆかば（四〇四四）

では「ゆか」を重出していない。同様の例は、「ひきをり」（二二一と四三三一）、「ふりたて」（一一九〇と三六三二）などについてもみられる。また、

虎ちふ神をいけどりに八つ一取り一持ち一来（き）（三八八五）

では「取り」「持ち」「来」と三つにわけ、すぐつぎの

陶人のつくれる瓶をけふ行きてあす一取り持ち一来（き）（三八八六）

では「取り持ち」「来」と二つにわけている。

この種の不統一も、利用者に誤解をさせる危険がある。万葉で「とりもつ」ということばをしらべたい人が索引をひくと、なまじ「とりもつ」の項目に二十ほどの例があがっているため、これでつ

くしているのだとおもって、切れている「とり」「もち」をひく気にならないかもしれない。しかし、量的には、この種の不統一は、第二・第三の型のよりも、はるかにすくないはずだ。

方針の不在や意見のちがいによる不統一について、以下、いくつかの項目にわけてのべる。

〔よみの決定〕

底本の漢字をどうよむかは、どの編者をもなやます問題だろう。「御子」は「みこ」か「おんこ」か「おほんこ」か、「三月」は「さんぐわつ」か「やよひ」か、「六尺」は「ろくしやく」か「ろくさく」か、など。かりに「三月十五日」とあれば、それぞれの索引で、つぎのようによんだはずだ。

「やよひとをかあまりいつか」土佐・更級
「やよひじふごにち」竹取・蜻蛉・源氏（池田・吉沢）・紫
「さんぐわちじふごにち」枕
「さんぐわつじふごにち」方丈・奥細道

なお、徒然では、月の名を一方で「きさらぎ」「さつき」「ながつき」「はつき」「みなづき」とよむとともに、「にぐわつ」「じふぐわつ」ともよんでいる。

文字のよみかたは、作品の年代や位相によって、あるいは、一つの作品のなかでも位相によって、まちまちであってもしかたがない。しかし、絶対的なよみが決定できない以上、ほかの可能なよみも参照項目としてあげておくことがのぞましいし、源氏（池田）でしているように、凡例で方針をあきらかにしておいてほしい。

万葉では、二とおり以上の解釈がなりたつばあい、おのおのの項目にあげて、「〜と重出」と注記している。これは便利な処置だが、この注記がぬけているばあいがかなりある。たとえば、

ウラヘル（相有・三二八九）はアヒタルと、
キシ（雉・一三八九）はタレと、
へ（上・二二）はカハカミと、

というように、注記がおちていても重出しているばあいがすくなくない。

〔かけことばの処置〕

これについては、

(A) 意味の主従を区別せずに両方にあげるもの（蜻蛉・徒然）
(B) 主従を区別して両方にあげるもの（伊勢・古今・池田・更級）
(C) 主たる方だけにあげるもの（竹取・土佐・枕・源氏（吉沢）・紫）

などのちがいがある。一般に便利なのは(B)かとおもうが、いずれにしても、ある方針をとったらそれで一貫しなければいけない。この点で、後撰のあつかいは、はなはだ統一をかく。ア行からひろったところでも、一方だけをあげた「秋——飽く」「明く——開く」「逢ふ——逢坂関」「逢ふ——逢坂山」「浮橋——憂し」「笠——憂気」などがあるとともに、「足——芦」「逢ふ——葵」「逢ふ——近江」「逢ふ——近江路」「綾——あやに」「因幡——往ぬ」「い寝——稲」「岩間——言ふ」「牛——憂し」「憂し——潮」「内——宇治の殿」「海——倦み」「裏——浦」「浦見る——恨む」などでは、両方の項目にとりあげ、しかもこのうち——をひいたものについては、両者がかけてあることについて注記がない。また、「逢ふ——逢坂」「置く——起く」ではある例は両方に、ある例は一方だけにあげてある。

〔見出し語のながさ〕

見出し語は原則として「単語」である、という点では、ここでと

りあげたすべての索引が一致している。しかし、具体的にどのような単位を「単語」とみとめるか、という点になると、かなりのちがいがある。こまかいところまであげるとキリがないが、わりに大きなくいちがいとしては、「散りはつ」などのいわゆる複合動詞、「ものおもふ」「かぎりなし」のように〈体言＋用言〉の構成のもの、「藤の花」「田子の浦」など〈体言＋の＋体言〉のもの、などがある。これらは、みな本来は二語以上のつながった形であって、現代語の感覚からすれば一語といいたくもなるようなものである。

(A) 複合動詞

「散りまがふ」「解き開く」などの複合動詞は、大体どの索引でもこの形であげている。ただ、万葉だけはこれらを「散り」と「まがふ」、「解き」と「開く」とにわけてあげている。しかし、すべてをわけているわけではなく、「出で立つ」「押しひらく」「おちたぎつ」など、一語としてあげているものもかなりあり、「おもひ～」などはほとんど一語としている。また、竹取では、つづけているものと切っているものとが、それぞれ相なかばする、といえるような結果になっている。つぎにあげる例で上はつづいているもの、下は切れているものだ。

うみおとす　――　かなぐりおとす
おきゐる　――　かくれゐる
おちかかる　――　くひかかる
おもひなげく　――　おぼしなげく
おもひをり　――　うなづきをり
かきおく　――　まりおく
きえうす　――　にげうす
たちかへる　――　こぎかへる
つりあぐ　――　ひきあぐ
とりいづ　――　よびいづ
なきふす　――　やみふす
めしとる　――　かひとる

なお、「ちりぞみだるる」「ちりもみだれむ」のように、あいだに助詞がはいったばあいは、上下をそれぞれ独立の動詞としているものがおおいが、紫は上を名詞とし、伊勢は「ちりもみだる」という見出しをたて、源氏（池田）は「ちりみだる」にあわせるなど、そのあつかいはかならずしも一定していない。

(B) 体言＋用言

これについても、単位の認定にはまようことがおおいはずだが、みな自明のことのように規定をもうけていない。わずかに源氏（吉沢）・紫・蜻蛉などで、「心」「もの」に形容詞・形容動詞がつづいているばあいは複合語とする、という規定がある程度である。索引によってどれほどマチマチかをしめすために、「～なし」という形のばあいをあげる。○は一語とするもの、×は二語とするもの、⊗は「いとまなし」を「なし」「いとまなし」に重複してだしているような類である。（分丈記には「～なし」の例がなかった。）

(C) 体言＋の＋体言

「～の山」「～の川」など、地名については一語としてあつかっても統一がとりやすいが、その他の普通名詞にまで範囲をひろげると、どうしても不統一になりがちだ。源氏（池田）では、「春の～」「秋の～」を全体で一語としている例がおおいが、「春の山」「秋の暮」をつづけているのに、「春の都」「秋の末つ方」を切っている理

索引間のくいちがいの例として、「〜の花」という形のばあいをあげる。ただし「〜」の部分は、「うめ」「さくら」など植物の種類をあらわすことばにかぎる。さきほどの表とおなじく○はつづけたもの、×は切ったもの、⊗は両方あるものである。（紫・方丈・伊曽保には例がなかった。）

	万葉	竹取	伊勢	古今	土佐	後撰	蜻蛉	枕	源氏（池田）	源氏（吉沢）	紫	更級	徒然	伊曽保（京大）	伊曽保（井上）	奥細道
ししばな	○	×														
ななかまど	○			○												
ななくさ		×		×	×											
ななしぐさ			○	×												
ななつひろい					×											
ななのこし						○										
ななへやへ							○									
ななめ																
ななもじ																
ななり																
ななりひさご																
ななりまがり																
ななりまがる																
ななりまがれる																
ななりまがれるべし																
ななりまがれるべしや																
ななりまがれるべしやは																
ななりまがれるべしやはと																
ななりまがれるべしやはとぞ																
ななりまがれるべしやはとぞさ																
ななりまがれるべしやはとぞさす																
ななりまがれるべしやはとぞさすが																
ななりまがれるべしやはとぞさすがに																
ななりまがれるべしやはとぞさすがにや																

由はよくわからない。後撰でも「秋の野」「秋のはじめ」「秋の夜」をつづけ、「春の野」「春のはじめ」「春の夜」は切っている、というような例がある。

〔後要素の処置〕

複合語の後要素、たとえば「さくらばな」の「はな」、「こぎいづ」の「いづ」などは、単独の「はな」「いづ」の項目に参照項目としあいいかかかくくこさしすたつなのひほまや

	万葉	竹取	伊勢	古今	土佐	後撰	蜻蛉	枕	源氏（池田）	源氏（吉沢）	更級	徒然	奥細道
ほ	○	×							⊗	×			
げ	○		○	○		○	○	○	○	×			○
めくらなこぶぢみもき	○								○	×		×	
がしなぶ	○		○	×	×	○	○	×	○	×			
さくばなぢまず	○			×				×	○	×	○		
どんぢでら	○							×	⊗	×			
うくま	○						○		○	×			
うきふ	○					○		×	○	×			
さくらばなこぶぢみもき	○								○	×			
たちばなぢまず	○								⊗	×			
なでしこ	○								○	×			
ねふもや	○								○	×			

て所在ぬきであげているものがおおい。もちろん、この方式で問題はないのだが、これとちがうやり方をとっているものがいくつかあるので、ふれておきたい。

まず、紫は参照項目にもいちいちページ数・行数をいれている。逆に奥の細道では後要素を参照項目としてもあげていない。「はな」のところでわかるのは、単独の「はな」についてだけで、このほかに「うのはな」「ねぶのはな」が独立の見出し語として立てられていることについては、なんの指示もない。

つぎに、後要素を単独の用法といっしょにしているのも、「さくらばな」「こぎいづ」の「はな」「いづ」を、単独の「はな」「いづ」と区別せずにあげているものがある。これには、どこまでこの方式を意識的につらぬいているかという点で、いくつかの段階がある。いちばん意識的で、徹底しているのは、竹取で、伊曽保（井上）では単独用法なみのものと区別したものと半々であり、土佐・後撰では単独用法中に構成要素としてのものがまぎれこんだという程度だ。

このやり方は、一見親切なようだが、実は不適当で、単独用法と構成要素としての用法とは、区別してあげるべきものとかんがえる。その理由はつぎのとおりである。

第一に、理論上の問題として、独立の単語と構成要素とは次元をことにし、その区別を無視して同列にあつかうべきではない、ということだ。索引をひくおもな目的は、そのことばがどんな文脈のなかでつかわれているかをしることにある。そして、構成要素にとっての文脈にあたるものは、合成語そのものであって、文ではない。「そのはな、いとうつくし。」という文で、「はな」の文脈は「そのいとうつくし。」だが、「そのさくらばな、いとうつくし。」のばあいの「――ばな」にとって、文脈にあたるものは「さくら――」である。「そのさくら――、いとうつくし。」ではない。だから、「――ばな」に対しては、「さくらばな」という合成語のなかでつかわれていることを指示することで十分であり、これが単独の「はな」についてそのもちいられた文全体をあげるのにひとしいのである。

第二に、実際上の問題として、単独用法だけしらべたいばあいにも、構成要素としての用法をふくめた全部の箇所にあたらなければならないことだ。竹取の「いづ」24例中、単独用法は10例であり、伊曽保（井上）の「づる（出）」58例中、単独用法は34例である。竹取のように例文つきの索引ではそれほどでもないが、伊曽保（井上）のように例文のついていないもののばあいは、いちいちあたってみなければ、単独用法かどうかをしることができない。

このやり方がのぞましくない第三の理由は、不統一になりやすいことだ。竹取は後要素を単独用法とおなじにあつかうという点で（「み子」「かくや姫」など少数の例外をのぞいて）一貫しており、伊曽保（井上）も複合動詞については一貫しているようだが、名詞のばあいはまちまちだ。左にいくつかの例をあげる。上のらんは、――をひいた後要素の部分が単独用法とおなじあつかいになっているもの、下のらんはそうでないものである。

土佐

うたぬし　追風　大声　かた
とき　川のぼりぢ

うりぴと　おしあゆ　かぢとり
甲斐うた　松原

後撰

みよしのの山　思ひ来　流れ

よしのの山　いのり来　帰り来

来| わたり来| あさいす| こ
ひす わかれす
伊曽保（井上）
朝腹| 上一人| 入り口| 果て
口| いたづら者| 臆病者

越え来| あさりす| つまこひす|
もみぢす

足元| ありさま| 片足| 手足|
うつわ物| おくり物

なお、複合語の前要素についても、後要素のばあいとおなじである。土佐・伊曽保（井上）では、これも単独用法といっしょにしているばあいがあるが、やはり不統一であり、区別してあつかうべきである。

〔見出し語のはば〕

形がおなじで、意味的にも共通性のあるいくつかの例について、多義語のいくつかの意味とみるか、それぞれ別の同音語とみるかについても、索引によってちがいがある。

この点でもっとも特徴的なのは奥の細道である。というのは、この索引には、見出し語にまとめる、という考えがまったくかけているからだ。それで、たとえば、つぎのような形が同列にならぶことになる。

かぶと・かぶと・返し・返し・返す・帰ら・帰り・帰り・帰る・かへるやま・帰れ・かほらす……

おなじ「かぶと」という単語が二度出てくれば、同音語とおなじように、別々にあつかわれる。「帰ら」「帰り」「帰る」「帰れ」などの活用形も、もちろんバラバラになる。たとえば、奥の細道には、サ変の「す」は命令形以外全部そろっており、カ変の「く」は一つもないのだが、これは「せ・し・す……」「こ・き・く……」と一つ一つの場所をみていかなければわからない。

このような初歩の電子計算機なみの機械的ならべ方をしているのは、さすがにこれだけだが、これにやや近いまとめ方をしているものに万葉と竹取がある。これらの索引では、活用語の各語形を別々の見出しとし、終止形のところに参照項目をあげることでまとめている。また万葉は表記がちがうごとに別語あつかいだ。これらは、どちらも同一語のなかの小見出しとすれば十分ではないだろうか。

まとめる形式はおなじでも、どこまで一語としてまとめるかは一致しない。たとえば「上」という単語をあげてみよう。

源氏（吉沢）―― ―― ―― ――
更 級――
伊 勢―
枕 ・ 紫―― ―― ――
蜻 蛉―― ――
源氏（池田）―― ―― ―― ――
間 上 上 上 妻（の人）
の
空 身 殿 主 貴

見出し語のはばの問題は、長さの問題にくらべて一般化しにくいし、研究もほとんどない。現代語の辞典でもやはりまちまちだ。この点については、理論的に一語とすべきものはどこまでかということと、実際上索引として便利なのはどういうものかということとをあわせて考えなければならない。意味がわけてあるのは、たしかに便利だが、それは、かならずしも別語とすべきだということではない。おなじ見出し語のもとに活用形でわけた小見出しでまとめるように、多義語についても、意味ごとにまとめた小見出しを立てることも一つの案だろう。ただし、小さな作品で用例つきの索引にできるなら、その必要もあまりない。

一般化しにくい問題だから、一つの索引のなかでの不統一という

ことはあまりない。しかし全然ないわけではない。「たまふ」などを本動詞と補助動詞とにわけているかどうかについて、つぎに示す。○は合併、×は別立しているものである。

	たまつる	たまふ	たまり	はべす	まう
竹取	○	○	○	○	○
伊勢	×	×	×	×	×
土佐	○				
蜻蛉	×	×	×	×	×
枕	×	×	×	×	×
源氏（池田）	×	○	○	○	○
源氏（吉沢）	×	×	×	×	×
紫	×	×	×	×	×
更級	○	×	○	○	○
方丈	×		○		
徒然	×	×	×	×	○
伊曽保（京大）	×				×
伊曽保（井上）	○				○

〔**活用形の認定**〕

活用語は活用形にわけて出すのが一般的だが、万葉・源氏（吉沢）・徒然・伊曽保（京大）は、未然と連用、終止と連体などで語形が一致しているばあいには、これらを区別せず一括している。六つの活用形をわけて立てているもののあいだでも、活用形のみとめ方自体くいちがっている点があり、その点をあきらかにしておかないと、活用形にわけることが無意味または逆効果になりかねない。

いわゆる完了の助動詞「り」の接続については、万葉・竹取は「〜り」の形で一語形とし、古今・土佐・蜻蛉・紫・奥の細道は已然形、伊勢・枕・源氏（池田）・更級・方丈は命令形につづくとして、半々にわかれている。後撰は原則として命令形だが、「立つ」「たのむ」「分く」などでは已然形としていて、不統一である。ところで、「り」が已然形接続か命令形接続かは、索引にとってあまり意味のない問題だ。「さけり」の「さけ」をどちらの活用形にしようと、それはまったく便宜上の処置であり、「さけども」や「……こそ……さけ」の「さけ」、あるいは命令の意味の「さけ」とはなんの関係もないからである。たいせつなのは、ある「さけ」が已然形か命令形かではなくて、「さけり」の「さけ」か「さけども」の「さけ」か命令の「さけ」かがわかるようになっていることである。同様に、「さか(ば)」と「さか(ず)」とをまとめて未然形とよび、「さく（花）」と「(花ぞ）さく」とをまとめて連体形とよぶことも、便宜的なものでしかない。前記の源氏（吉沢）などが同形の活用形を一括しているのにくらべて、本質的なちがいはない。「さけ（り）」か「さけ（ども）」か、「さか（ば）」か「さか(ず)」かが、本文にかえらなくても索引の方でわかるようになることを希望する。もちろん、かんたんにでも用例がついていれば、この問題はほとんど解消する。

〔**見出し語のならべかた**〕

見出し語を五十音順にならべるという原則では、すべての索引が一致しているが、こまかい点にはくいちがいがある。

第一に、伊勢は複合語を単独用法のつぎにあつめている。それで、たとえば、

きみ・きやう（京）・きやうひと・ぎやうかうす（行幸）・きゆ（消）・きえのこる・きえはつ・きよし・きよらなり・きり(霧)・きる（切）・きる（着）・く(句)・く(来)・きつく(来着)・ぐ(具)・くくる

という順序になって、「京人」「消え残る」「消えはつ」「来着く」などの位置がちがってくる。

第二に、「植う」「据う」「老い」「消え」「絶え」などの語尾（第二音節）をア行にいれずにワ行・ヤ行にいれているものがある。伊勢はヤ行について自然そうなるが、そのほか、万葉・土佐・後撰・

紫・徒然がそうしている。更級は、「植う」はア行で「据う」はワ行、「絶ゆ」はア行で「見ゆ」はヤ行と、不統一である。

このようならべかたは、理論的なようだが、かえって不便である。索引は、ふつう、最初から順々にみていくものではなく、いきなりある単語をさがすものだ。そして、その際、特別の予備知識なしにひけることがのぞましい。「植う」「消え残る」をひくばあい、常識的にはまずア行のところをみるだろう。上記の索引のうち、徒然はア行のところにも参照項目をのせてヤ行のページを指定しているからいいが、ほかのものでは、ア行にないと、その作品にはこれらの単語が出てこないのだと判断するおそれがある。しかも、このような扱いについて凡例に明記してあるのは、万葉・紫だけで(紫はヤ行についてだけ)、土佐・後撰・更級・徒然は一言もふれていない。

三

以上、いくつかの項目にわけて現状をのべてきたが、さらによい索引をつくるために、これからあたらしく編集しようとしておられる方に希望をのべたい。

まず、上にみてきたように、一つの索引のなかでも、いろいろの点で不統一が生じがちなのだから、最初に相当しっかりした方針をたてて、これをおしとおすようにしていただきたい。キチンと指導してなかった学生のレポートをそのまま出版するようなことがあってはいけない。そしてその方針をできるだけくわしく凡例に書いていただきたい。いままでの索引の凡例をみると、かなりくわしいものもあるが、大体はかんたんにすぎる。概していえば、凡例がくわしく、しっかりしているものほど、内容的にもすぐれているようである。このことは、凡例のかんたんな索引は、方針があって書かなかったのではなく、最初つくるときから方針がなかったのではないか、とうたがわせる。単語の認定がどれほど困難な問題であり、現にどれほどくいちがった結果が出ているかについて、じゅうぶんな自覚があれば、その索引での単語認定の方針について一言ふれておくのが当然であろう。

なお、おなじ作品についての索引がすでにあるばあい、たとえば源氏(池田)・伊曽保(井上)などで、「まえがき」に先行の索引に一言もふれていないのは、ふしぎにおもわれる。コツコツとつくりあげてきた索引が、ほかの人の企画が先に世に出たために、出版できなくなった、という例は、おそらく一、二にとどまらないだろう。しかし、先行のものよりもすぐれた特色をもっているものなら、一つの作品について第二、第三の索引がつくられてもムダではない。先行のものがあるにもかかわらず出すのには、当然それだけの自信があるはずだから、その特色とおもう方針をのべるのが、学問をすすめる道ではないだろうか。

つぎに、一つの索引のなかで一貫した方針をとっても、他の索引とのあいだには不統一がのこる。これについては、学問上の見解の差から生じる不統一と、もっと純粋に技術的なものとを区別しなければならない。純技術的というのは、たとえば「植う」「消え残る」をア行にするか、ワ行ヤ行にするか、というようなことで、これは音韻史についての知識よりも現代人にとってのひきやすさという観点からきめるべき問題だ。

しかし、不統一のおおくは、技術的であるよりも学問的な問題である。「このごろ」を一語にするか「この」と「ころ」とにわけるか

は、連濁のありなしについての音韻史の見解に左右される。「あはれ」を名詞と形容動詞にわけるかどうかは、形容動詞という品詞をみとめるかどうかという文法論上の立ち場によって決定される。このような問題のばあいに、研究者である編者が自分の学問上の立ち場を第一にかんがえるのは当然だ。研究がすすんで、これまでの統一がやぶられることがあっても、むしろ歓迎すべきことで、すべてを技術的に処理しようとするのは、学問の進歩をはばむことにほかならない。

対象のがわから考えてみても、万葉から奥の細道にいたる千年のあいだに当然いろんな変化がおこっている。ふるくは二語だったものが一語になったり、漢字のよみがかわったりしている。だから、それぞれの作品のことばに忠実なら、不統一にならない方がおかしいのである。そのことを認識したうえで、なお現代人としてのつかいやすさという観点から修正し、ほかの索引と歩調をそろえる、という立ち場もありうる。しかし、現状はまだそこまで達していない。学問を前提にして技術的な処理がされているのではなく、学問が技術的処理に解消している傾向がつよい。方針の不統一、したがって実用上の不便は、学問を重視しすぎたためにではなく、これを無視・軽視したためにおこっている。

だから、このような問題については、ほかの索引との不統一を気にするよりも、自分のただしいと信ずる方針をはっきりうちだすことがのぞましい。今みたいに、事実としての不統一にとどまっていて、どこがどうちがうのか凡例をよんでもわからない、という状態では、どちらのやり方がいいのかという議論もおこりにくい。それが方針としての不統一・対立となって顕在化すれば、かえって、研究対象としての問題のありかがはっきりして、よりたかい水準での統一をうながすことになるだろう。

ただし、そのばあい、ほかの立ち場にたっても利用できるような親切さが必要だ。たとえば、徒然では形容動詞をみとめていないが、「～なり」「～に」などの用法を分類することによって、名詞から形容動詞をとりだしやすいようになっている。「うめのはな」「さくらのはな」を一語としてつづける立ち場にたつなら、これを切る立ち場をもかんがえて、「はな」のところに参照項目をあげるべきだし、逆に切る説にしたがう索引では、どれが「うめのはな」の例かが本文にかえらなくても「はな」の項目でわかるようにしてあることがのぞましい。このような、ほかの方針への配慮ということは、自分自身の方針がしっかりたっていなければ、とても問題にならないはずのことだ。

四

索引の方針が上にみるようにまちまちなので、そのままで作品間の比較をするのには不つごうなばあいがある。その例として品詞別統計のばあいをあげてみよう。（なお、以下の数字はすべてことなり語数である。）

大野晋氏は「基本語彙に関する二三の研究」（国語学24集）のなかで、讃岐典侍日記の索引が複合動詞を二語にわけているため、動詞のパーセンテージが異常に低くなり、この点を修正した結果、ほかの日記類に近い値がえられたことをのべている。讃岐典侍日記は特に大きく結果がちがったので、単位のとり方をあらためなければならなかったのだが、実は、大野氏の調査のうち、動詞の割合がもっ

ともひくいのが万葉であることにも、単位の問題がからんでいるのではないかとおもわれる。大野氏によれば、名詞・動詞の量は上のような比率になっていて、万葉の動詞は随筆グループよりもすくない。しかし、万葉集総索引では、複合動詞のおおくが切れていて、たとえば「咲く」を前要素とするものでは「さきちる」しか見出し語にないが、ほかの索引と同様の基準を適用すれば、このほかに「さきいづ」「さきすさぶ」「さきそむ」「さきつぐ」「さきにほふ」「さきまさる」「さきゆく」「さきををる」などをみとめなければならない。また、他の索引にそろえるには、「あさりす」「こひす」「たえす」「つりす」など、おおくのサ変動詞をたてるべきである。本当はほかにも相違点があるが、一応この二点にかぎって修正すると、万葉の数字はつぎのようにうごく。

	名詞	動詞
万葉	63.3	21.0
枕	55.6	29.5
方丈	56.5	29.5
徒然	58.6	28.5
	(%)	(%)

(A)「さきいづ」など、あらたに複合動詞としてみとめたもの八九五、これにともなって、「すさぶ」のように単独用法がなく、見出し語からきえる動詞一一二。

(B)「あさりす」のように、あらたにサ変動詞としてみとめたもの八一、これにともなって、「あさり」のように名詞からきえるもの四〇。

この結果、万葉は総語数八一八〇、うち名詞四六二〇（五六・五%）、動詞二四〇九（二九・四%）となる。これは、大野氏の調査対象のなかでは方丈記の値にちかい。万葉が随筆グループとちがう品詞別分布をもっているようにみえたのは、索引のせいとおもわれる。

古典の品詞別統計は、また、日本古典文学大系「古今和歌集」の解説（西下経一氏執筆）にもみえる。ここでも、万葉集の動詞は、一三五一語（二一・三%）と、かなり少なくなっている。この集計には、索引を利用したのかどうか不明で、どのように単語を認定したのかあきらかでないが、とにかく、この数字は、複合動詞をすべてつづけたにしては少なすぎ、すべてきったにしては多すぎるので、基準の一貫性はうたがわしい。

この解説には、また「古今集の動詞の三分の一は複合動詞であり、万葉集にはこのように多くの複合動詞は見られない。」とある。しかし、前記のように索引にもれた見出し語をおぎなって考えると、万葉の複合動詞は、むしろ単純動詞よりもずっと多いのである。（古今でも「三分の一」より多い。）だから、万葉では「種々の素材を比較的単純な動詞をもって叙述し、素朴美をかもし出している」のに対し、古今・新古今では「限られた素材を、精細な叙述を可能にする複合動詞を用いて、きめ細かな叙述の中に優美な観念形態とその雰囲気を巧みに表現する事に主力が注がれるようになった」などという説明は、まったく根拠をかいているものといわなければならない。（ただし、逆に、万葉の複合動詞の比率が古今よりもたかいことから、なにか文体上の結論をだそうとするのもまちがっている。万葉は古今よりもずっと量がおおい。そして、まったく同質の作品でも、量がおおくなれば、単純動詞に対する複合動詞の比率は、ことなり語数の面ではたかくなるはずだから。要するに、この問題について、ことなり語数の比較だけで論じようとすることは危険である。）

このように、索引をつかうにしろ、つかわないにしろ、単語の認定によく注意しないと、まちがった結論をだすおそれがある。上にのべてきたように、索引間に方針の不統一が大きい現状では、この危険性はかなりたかいのである。

―国立国語研究所員―